ようこそ校長室へ！

Ｎｏ．15
令和５年６月１５日
発行 ： 貝 塚 敦

に にこにこ笑顔で い いつもみんなで つ 紡ぎ繋げる心で に 日本一をめざすのだ

赤信号 それでも君は 渡りますか?

＜規範意識の醸成に向けて②＞

小学校１年生のとき、神社の境内で缶けりをして遊んでいると、50 円玉を拾った。帰宅して母に告げると、「あら良かったわね。アイスクリームでも買ったら。」と言ったので、喜び勇んで近所の駄菓子屋に駆け込んだ。

翌日学校で、担任の先生にそのことを話すと、「どうして交番に届けなかったの。お金を拾ったらお巡りさんに届けるのが当たり前でしょ。拾ったお金を自分のものにしたら泥棒と一緒じゃない。」帰宅してそのことを母に告げると「何言ってんのよ。お巡りさんだって忙しいのよ。1 円、10 円、50 円くらいのお金を拾ったって、落とし主がわかるはずないでしょ。50 円落としたって交番に届ける人なんかいないわよ。一人しかいない村の駐在員さんだって、もっと大事な仕事があって忙しいんだから、かえって迷惑をかけるわよ。」翌日再び担任。「50 円だって百万だってお金に変わりはないでしょ。金額の問題じゃないでしょ。」　二人の猛女に連日代わる代わる責め立てられ続けた。俺を挟まないで直接二人でやり合ってくれよ、と思いつつ、アイスクリーム 1 本の代償はあまりにも大き過ぎると感じる出来事だった。

中学２年生のとき、風邪で休んで翌日学校に登校したら、担任の先生から小言を言われた。

「きのうお前が朝登校してなかったから、自宅に電話したらずっと話中で、ご両親の仕事場に電話したんだよ。お父さんが電話に出られたから『息子さん今日お休みですか？』と言ったら、『いや～、ちょっとわかりません。』だ。自分の子どもが病気で休んでいるのを知らない親もいるんだな。」

父親にわかるはずがない。毎朝 5 時には仕事に出かけてるんだ。近くにある自営の工場に。定時に出社して定時に帰る会社員ではないんだ。早朝から夜遅くまで俺たち家族のために汗まみれ泥まみれで働いてくれているんだ。お天道様が上がらない暗いうちに起き出して家を出て既に仕事と格闘している親父に、自分が朝発熱した事実を知るすべも余裕もなかった。

切った張ったの自営業の世界で生きてきた、「渡る世間は鬼ばかり」の女主人ばりの私の母親が、学校の先生は、みんな優秀でいい人で一生懸命なんだけれど、ちょっと「頭が固い」「融通が効かない」「世間知らず」だと捉えていたようだというのは、前者のようなエピソードを通して子どもながらに自分も感じていた。

自分が教師というその立場になって内側から分析すると、それはあながち的外れではないような気がする。大方の人が、大学を出た瞬間から「先生」と呼ばれる。たとえ外部でそれなりに社会勉強を積んだ後に教師になったとしても、年端

もいかない子どもたちを相手に、ある意味社会から隔離された「学校」という狭い世界で日々過ごしていれば、そういう代物になってしまう懸念は大である。世間の批判を謙虚に受け止め、そうあってはならないと肝に銘じたいものだ。
　しかし、しかしだ。冷静に考えれば、前者は先生が言っていたことの方が、法的にも人としても 100%正しいのだ。後者の件だって、学校を休むのに連絡し忘れていたのは、我が家の落ち度だ。家庭の事情はその家庭の勝手な都合だ。先生だって何の連絡もないままいつまで経っても登校しない教え子のことを、通学途上で事故でもあったのではと、さぞや心配しただろうと推測できる。小言の一つでも言いたかったはずだと充分に理解できる。

　話は変わるが、以前、サッカーの日本代表監督をしていたトルシエが、当時嘆いていた言葉を思い出す。「日本のサッカーはとにかく創造性がない。日本人は、赤信号だったら、車が全く通らない場所だって絶対に渡ろうとしない。たとえ信号が赤だとしても、その時の状況を自分で判断して渡るようにしないと。」　個々の選手の創造性の欠如から、一向に得点力が上がらない日本代表チームの現状を、こんな例えで表現して嘆いてみせた。当然一流選手への高いレベルの注文と叱咤であり、背景には日仏の国民性の違いもある。子どもたちに日々接する我々大人が、額面通り受け止めるわけにはいかない。
　ただ教育的な見地から言えば、「赤信号の時は渡っちゃいけない」ということを骨の髄まで分かっていて、その上で自分の判断で信号を無視するのと、「赤信号の時は渡っちゃいけない」ということを知らないで、あるいは充分身につけていないで信号無視することは全く次元の違う話だ。雲泥の差だ。
　つまりだ、目の前にあるボールを自分の思い描いたところに蹴れる技術なくして、どうして創造的なプレーなんて望めようか。要は、「基礎基本」「原理原則」がしっかり身についていないのに、「応用」「創造」が生まれるはずはないということだ。

　学校は、処世術や世渡りの仕方や要領の良さを教える場ではない。ある意味「基礎基本」「原理原則」を教える場所だと思っている。たとえ「世間知らず」と言われようとも、教師は、毅然として胸を張って筋金入りの「世間知らず」を通さなければならない時もある。もちろん家庭や地域も然りだ。
　学校のみならず、家庭や地域の教育力が低下したと言われて久しい。確かに、幼児期や義務教育時期に、大人全体や地域ぐるみで子どもたちに叩き込まなければならない「基礎基本」「原理原則」を、我々大人が疎かにしてきたのかもしれない。町で交通マナーが悪い子どもの姿を見かけたら、あなたのすべきことは学校にクレームの電話を入れることではない。即座にそこで自分自身で注意することなのだ。そこで、一人の大人として、世の中の子どもたちと向き合ってほしいのだ。

　長い赤信号の交差点で、赤信号を無視して横断歩道を渡った輩がいた。急いでいたので、つい私も、と思った瞬間、私の背後で「あんなデタラメな大人になっちゃだめよ。赤信号の時は絶対に渡っちゃいけないの。絶対よ。」幼い子どもの手を引いた若いお母さんが、信号無視した男の背中に鋭い視線を突き刺しながら、こう子どもに言い聞かせていた。
（いいぞヤンママ、その調子その調子。まだまだ日本も捨てたものじゃない。）